

岐阜キリストン小史(51)―岐阜を訪れたイエズス会宣教師⑪―

岐阜における信長とカブラル(フロイス『日本史』より)(3)

前回から続く。当時の日本では眼鏡は大変珍しい物であったのだろう。

3. 岐阜での滑稽な出来事(眼鏡の誤解)

- 司祭への驚嘆：岐阜の住民にとって、伴天連は見たこともない人々で、目新しくはなはだ数奇な人々であった。
- 眼鏡への誤解
 - 近視のフランシスコ・カブラルが岐阜で眼鏡をかけていたことに、一般民衆は衣装よりもはるかに大きい驚嘆を覚えた。
 - 庶民の間では、「伴天連には眼が四つあり、二つは普通の位置に、他の二つはそれから少し外にはずれたところにあって、鏡のように輝き、恐るべきもの」という噂が流布した。
 - 司祭たちの出発日には、岐阜市だけでなく遠隔地や尾張の国から四、五千人の人々が、この不可思議な者を見ようと殺到した。
 - 好奇心から宿泊していた家へ侵入しようとしたため、家主は二階へ昇る階段を取り外す必要があった。
 - 最初に出てきたのは片眼が盲目のロレンソ修道士であったため、四つ眼を期待していた人々は大声で笑わざるを得なかった。
 - 後にフロイスが出てきても眼が二つしかなかったが、人々は三千人ほどで彼を取り巻き、郊外半里のところまで同行した。

4. 都帰着後の出来事

- 公方様（足利義昭）の敬意：公方様は信長からの報告を聞き、信長同様にカブラルに敬意を示すことを決めた。
- 公方様との会見：カブラルは下の地方に戻る前に、フロイス、オルガンティーノ、ロレンソ修道士を伴い公方様を訪問した。
- 最高の礼儀：公方様は自ら盃と肴をカブラルに授けた。
- 贈物：その後、公方様の政庁でもっとも高位の貴人、上野殿が、六十本の塗金した扇を贈った。
- 神の摂理：これらの格別の行為は、仏僧にも示されないほどの好意であり、キリストンの敵や反対者への屈辱となり、キリストンの信仰を強化するというデウス（神）の摂理によるものと見なされた。

(注)高位の貴人上野殿…三淵藤英のこと。 



若き日の織田信長像(岐阜公園前)